

阿蘇山の火山活動解説資料（平成 24 年 11 月）

福岡管区気象台
火山監視・情報センター

火山活動に特段の変化はなく、火口周辺に影響を及ぼす噴火の兆候は認められませんが、火口内では土砂や火山灰の噴出する可能性があります。また、火口付近では火山ガスに注意してください。
平成 23 年 6 月 20 日に噴火予報（噴火警戒レベル 1、平常）を発表しました。その後、予報警報事項に変更はありません。

○ 11 月の活動概況

・噴煙など表面現象の状況（図 2、図 3、図 4-①④、図 5-②～④⑥～⑧、図 12、図 13）

噴煙活動に特段の変化はなく、白色の噴煙が概ね火口縁上 200m で経過し、最高で火口縁上 400 m まで上がりました。

湯だまり¹⁾量は、10 割（10 月：10 割）で特段の変化はありませんでした。湯だまりの表面温度²⁾は 49～51℃（10 月：49～54℃）と特段の変化はありませんでした。湯だまりの中央付近の噴湯現象³⁾は確認されませんでした。

南側火口壁の温度²⁾は、253～312℃（10 月：255～264℃）で特段の変化はありませんでした。赤外熱映像装置⁴⁾による南側火口壁の温度分布には特段の変化はありませんでした。

夜間には高感度カメラで確認できる程度の微弱な火映⁵⁾を時々観測しましたが、これは火口壁の赤熱⁶⁾によって生じたものと考えられます。

・地震や微動の発生状況（図 4-②③⑤～⑦、図 6）

孤立型微動⁷⁾および火山性地震はともに 2012 年 2 月頃からゆるやかな増加傾向を示していましたが、9 月中旬以降は減少し、10 月中旬以降は少ない状態で経過しました。孤立型微動の月回数は 20 回（10 月：152 回）、火山性地震の月回数は 20 回（10 月：324 回）と減少しました。火山性地震の震源は、中岳第一火口付近のごく浅いところに分布しました。

火山性微動は発生しませんでした（10 月：なし）。

この火山活動解説資料は福岡管区気象台ホームページ（<http://www.jma-net.go.jp/fukuoka/>）や気象庁ホームページ（<http://www.seisvol.kishou.go.jp/tokyo/volcano.html>）でも閲覧することができます。次回の火山活動解説資料（平成 24 年 12 月分）は平成 25 年 1 月 10 日に発表する予定です。

※この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、独立行政法人防災科学技術研究所及び阿蘇火山博物館のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図 50mメッシュ（標高）』と『数値地図 10mメッシュ（火山標高）』を使用しています（承認番号：平 23 情使、第 467 号）。

・地殻変動の状況（図 7、図 8）

GPS 連続観測では、火山活動によると考えられる変化は認められませんでした。

・全磁力の状況（図 9～11）

中岳第一火口の北西側火口縁にある観測点(CW2、CW3)では、2010 年 12 月頃から全磁力が増加しており、火口地下の温度上昇を示唆している可能性があります。

- 1) 活動静穏期の中岳第一火口には、地下水などを起源とする約 50～60℃の緑色の湯がたまっており、これを湯だまりと呼んでいます。火山活動が活発化するにつれ、湯だまり温度が上昇・噴湯して湯量の減少や濁りがみられ、その過程で土砂を噴き上げる土砂噴出現象等が起こり始めることが知られています。
- 2) 赤外放射温度計で観測しています。赤外放射温度計は、物体が放射する赤外線を検知して温度を測定する測器で、熱源から離れた場所から測定できる利点がありますが、測定距離や大気等の影響で実際の熱源の温度よりも低く測定される場合があります。
- 3) 湯だまり内で火山ガス等が噴出し、湯面が盛り上がる現象です。
- 4) 赤外熱映像装置は物体が放射する赤外線を検知して温度分布を測定する測器です。熱源から離れた場所から測定することができる利点がありますが、測定距離や大気等の影響で実際の熱源の温度よりも低く測定される場合があります。
- 5) 赤熱した溶岩や高温の火山ガス等が、噴煙や雲に映って明るく見える現象です。
- 6) 地下から高温の火山ガス等が噴出する際に、周辺の地表面が熱せられて赤く見える現象です。
- 7) 阿蘇山特有の微動で、火口直下のごく浅い場所で発生しており、周期 0.5～1.0 秒、継続時間 10 秒程度で振幅が 5 $\mu\text{m/s}$ 以上のものを孤立型微動としています。

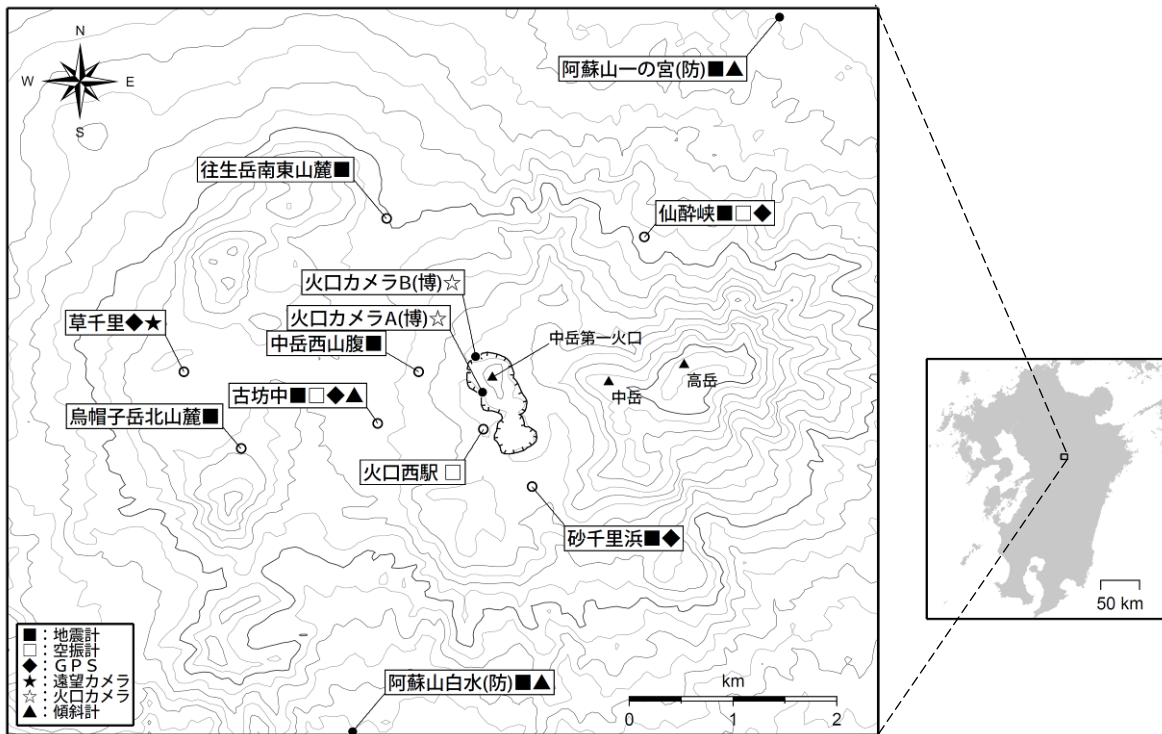


図 1 阿蘇山 観測点配置図

小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
 (博)：阿蘇火山博物館、(防)：防災科学技術研究所



図2 阿蘇山 噴煙の状況（11月3日、草千里遠望カメラによる）
白色の噴煙が火口縁上 400mまで上がりました。



図3 阿蘇山 噴煙の状況（11月22日、草千里遠望カメラによる）
高感度カメラで確認できる程度の微弱な火映を観測しました。

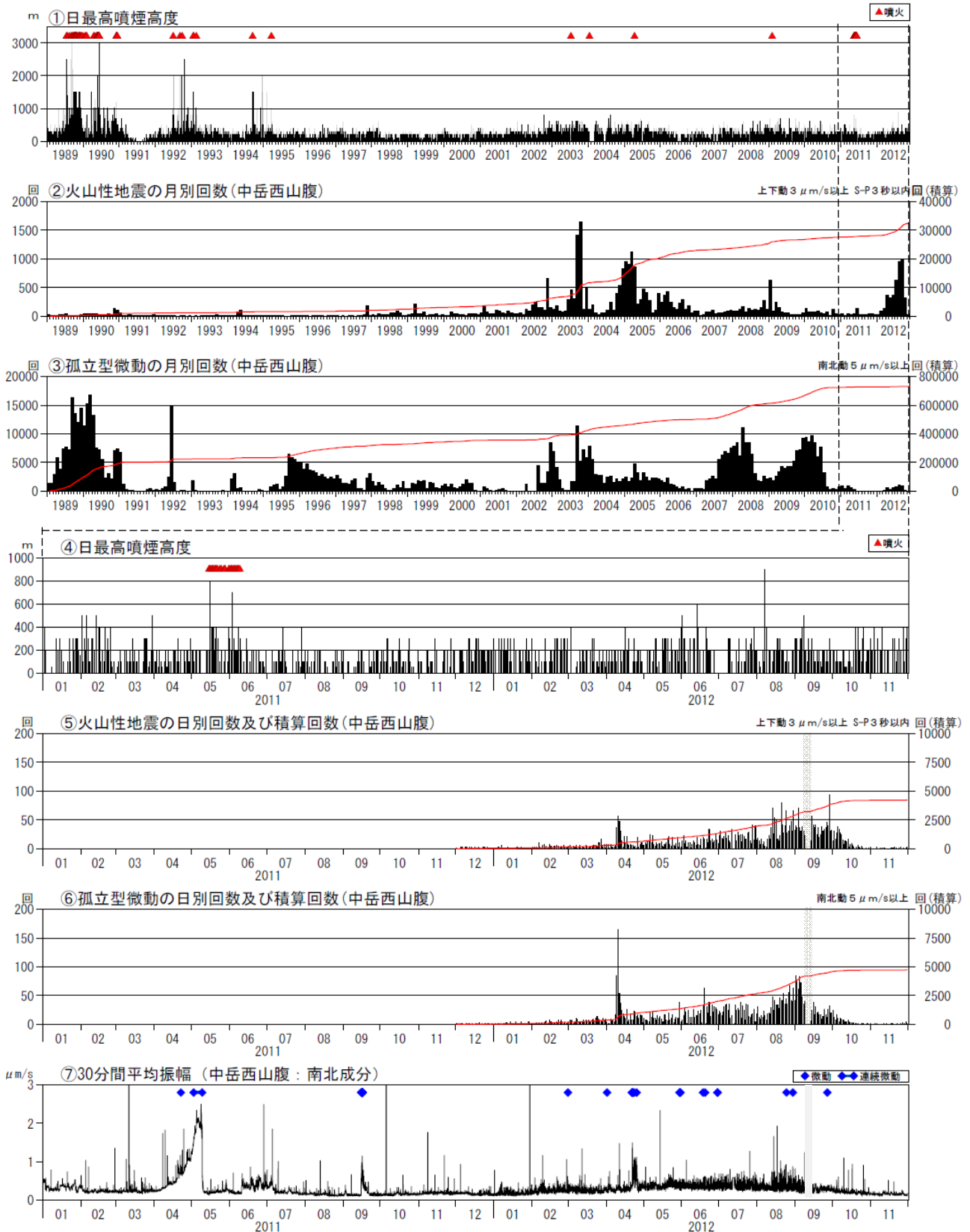


図 4 阿蘇山 火山活動経過図（1989 年 1 月～2012 年 11 月）
 緩やかな増加傾向を示していた孤立型微動および火山性地震は 2012 年 9 月中旬以降減少しています。
 <11月の状況>

- ・噴煙活動に特段の変化はなく、白色の噴煙が概ね火口縁上 200m で経過し、最高で火口縁上 400m まで上がりました。
- ・孤立型微動は、月回数が 20 回（10 月：152 回）と減少しました。
- ・火山性地震は、月回数が 20 回（10 月：324 回）と減少しました。
- ・火山性微動は発生しませんでした（10 月：なし）。

灰色部分は障害のため欠測を示しています。
 2002 年 3 月 1 日から検測基準を変位波形から速度波形に変更しました。

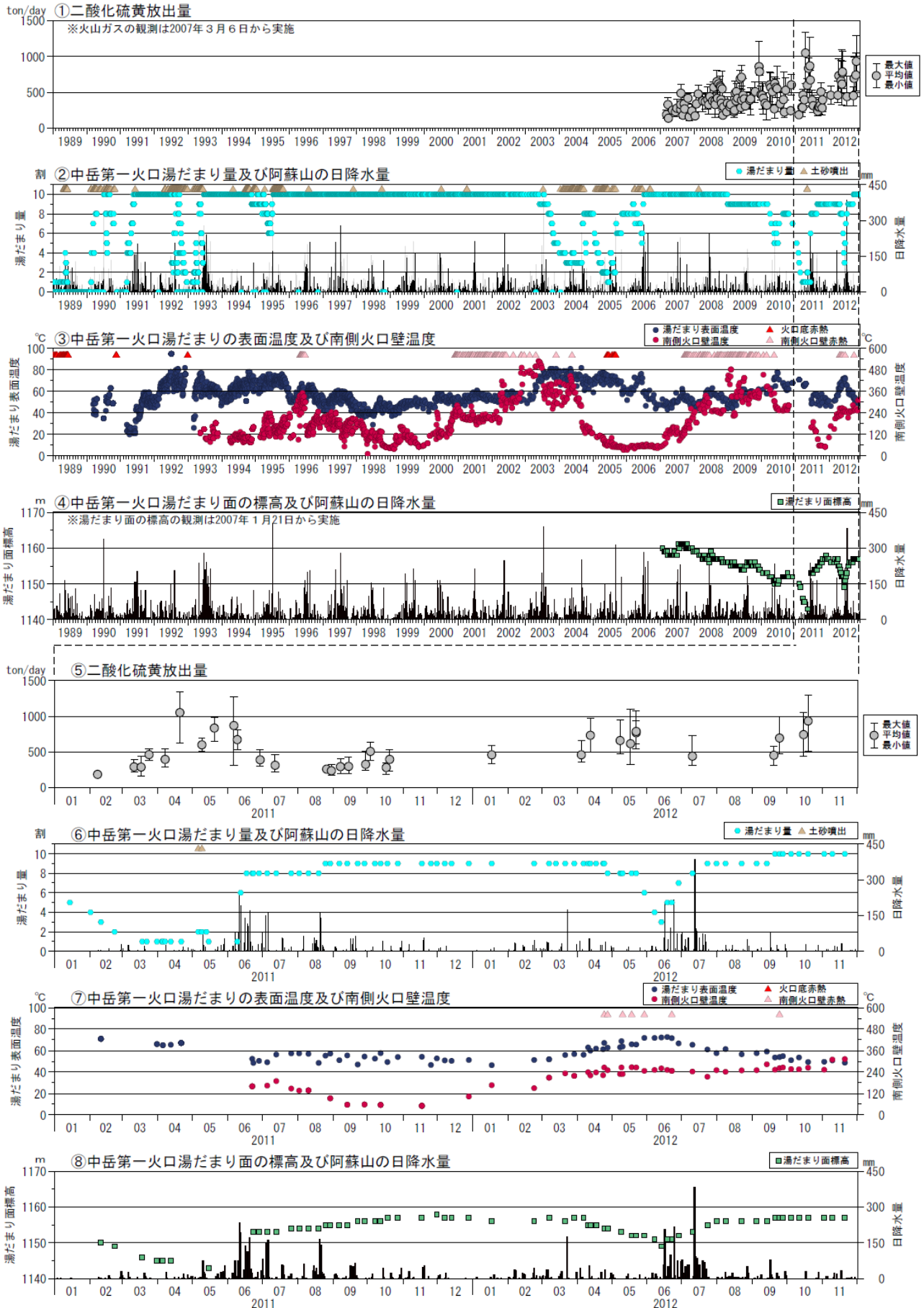
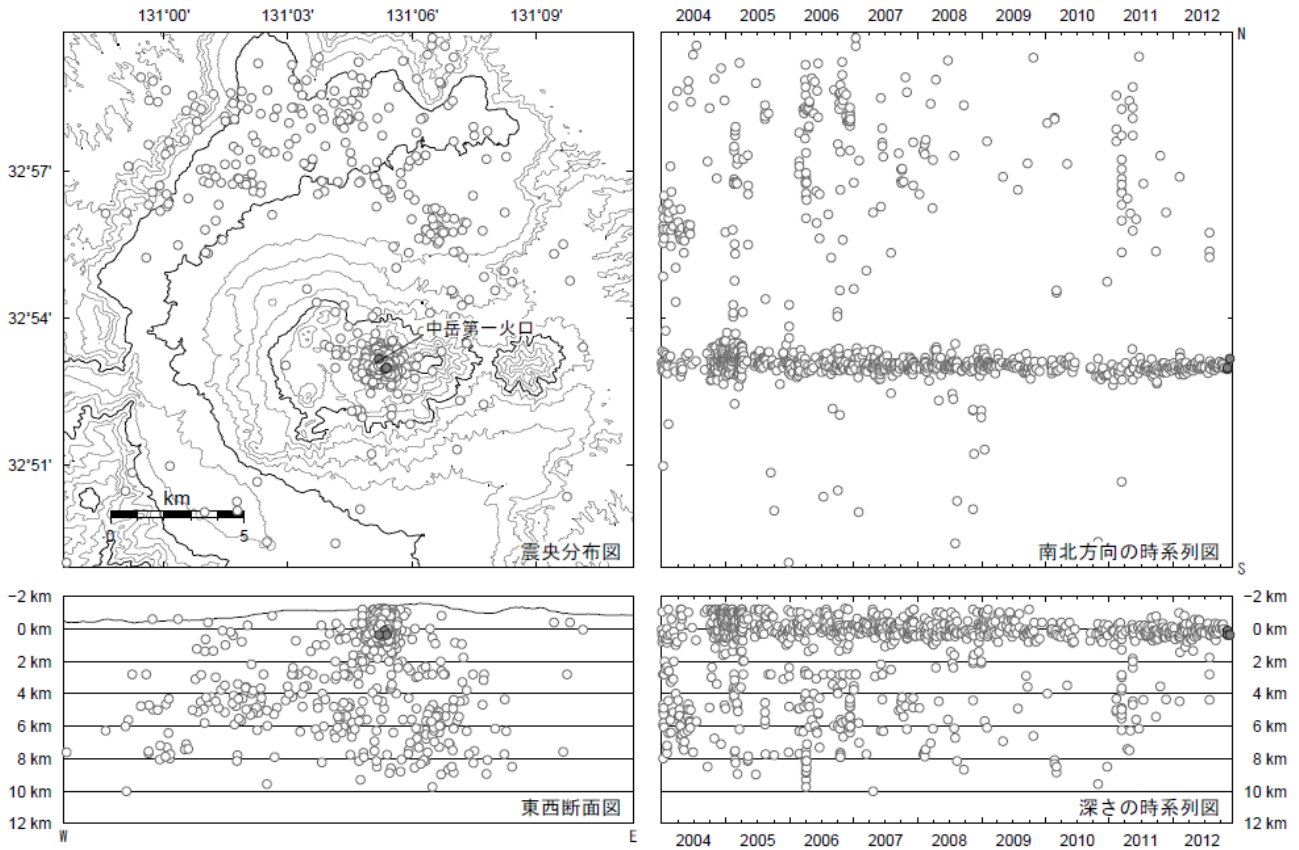


図5※ 阿蘇山 湯だまり、火口壁、二酸化硫黄放出量の状況（1989年1月～2012年11月）
 <11月の状況>

- ・湯だまり量は10割（10月：10割）で特段の変化はありませんでした。
- ・湯だまりの表面温度は49～51℃（10月：49～54℃）と特段の変化はありませんでした。
- ・南側火口壁の温度は253～312℃（10月：255～264℃）と特段の変化はありませんでした。



- : 2012 年 11 月の震源
- : 2004 年 1 月～2012 年 10 月の震源

図 6※ 阿蘇山 震源分布図（2004 年 1 月～2012 年 11 月）

<11 月の状況>

震源は、中岳第一火口付近のごく浅いところに分布しました。

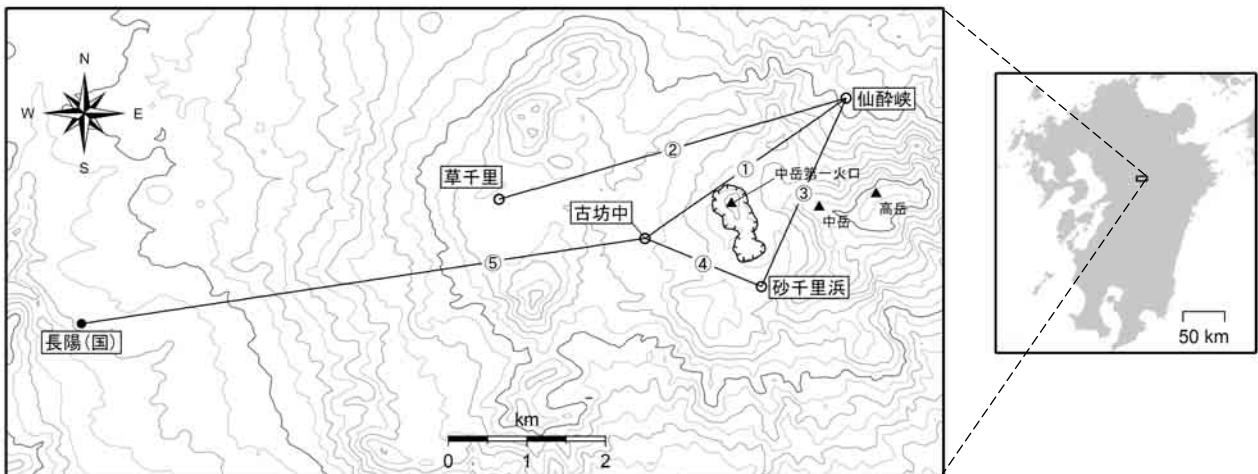


図 7 阿蘇山 GPS 連続観測点と基線番号

小さな白丸 (○) は気象庁、小さな黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
(国) : 国土地理院

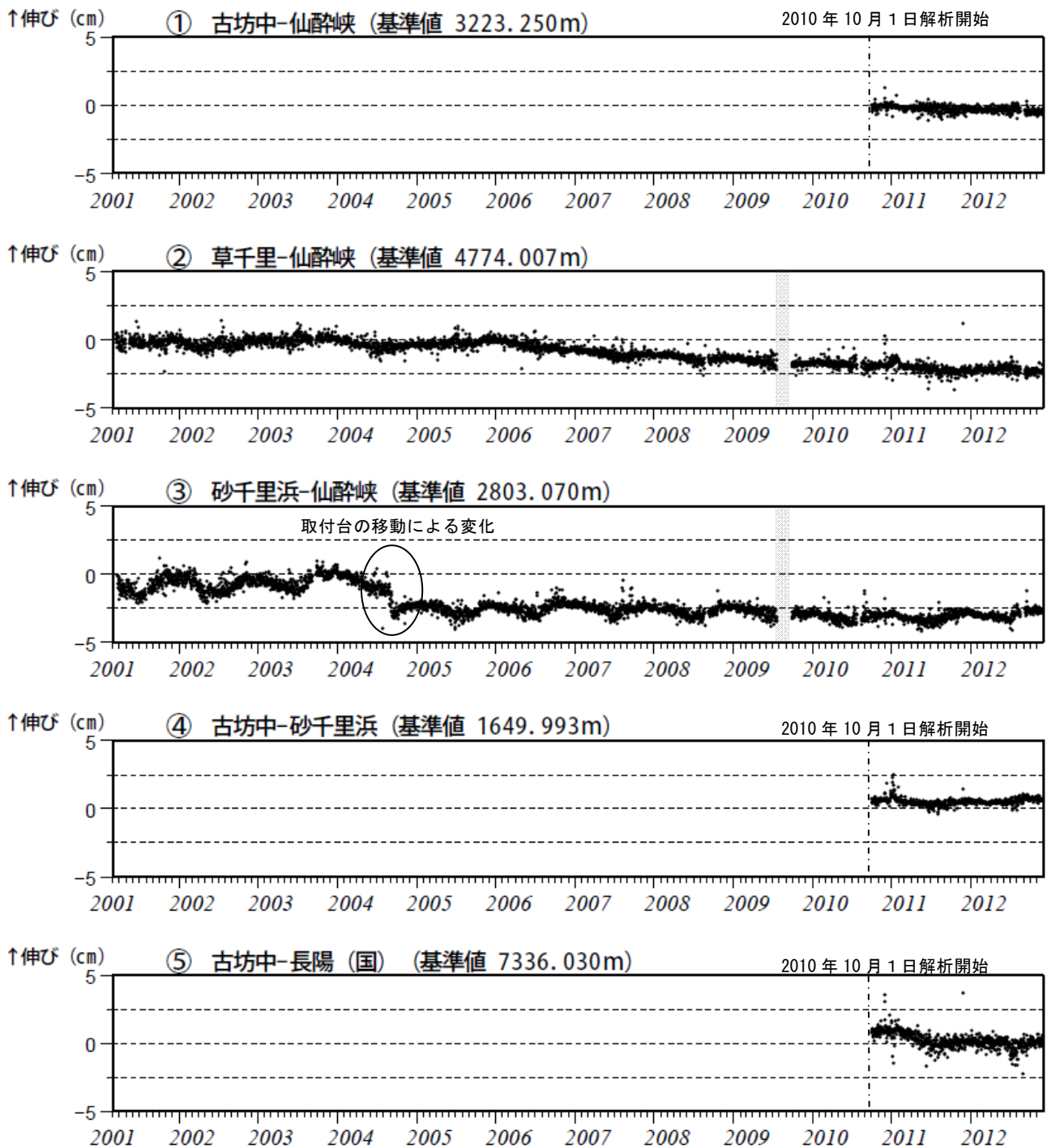


図 8※ 阿蘇山 GPS連続観測による基線長変化 (2001年3月~2012年11月)

GPS 連続観測では、火山活動によると考えられる変化は認められませんでした。

この基線は図 7 の①~⑤に対応しています。

2010年10月以降のデータについては、電離層の影響を補正する等、解析方法を改良しています。

灰色部分は障害のため欠測を示しています。

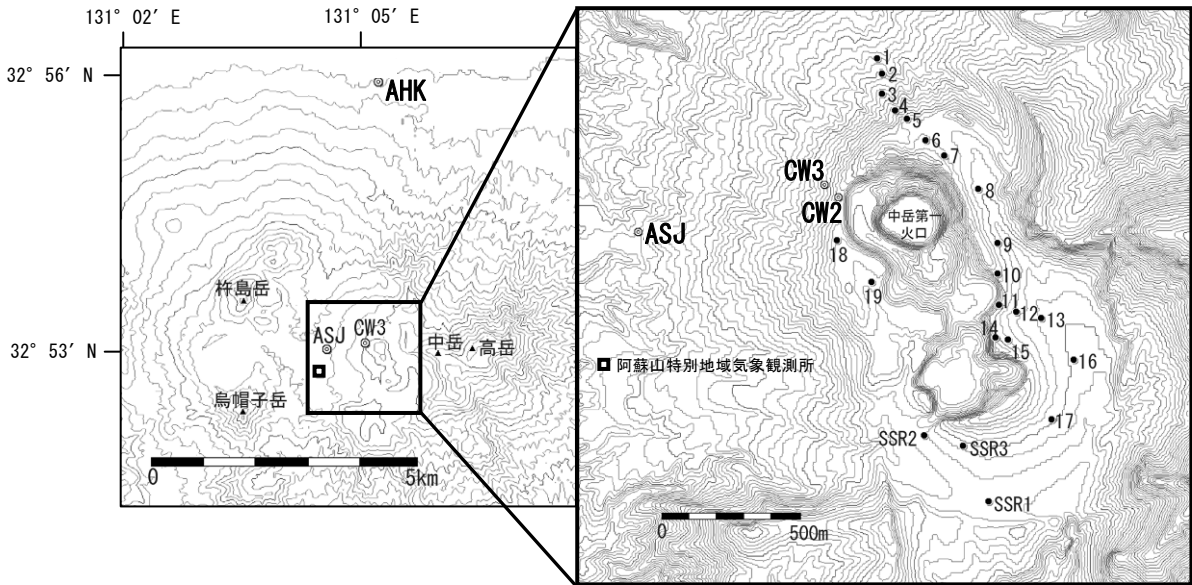


図9 阿蘇山 全磁力観測点配置図(◎：連続観測点 ●：繰返し観測点)

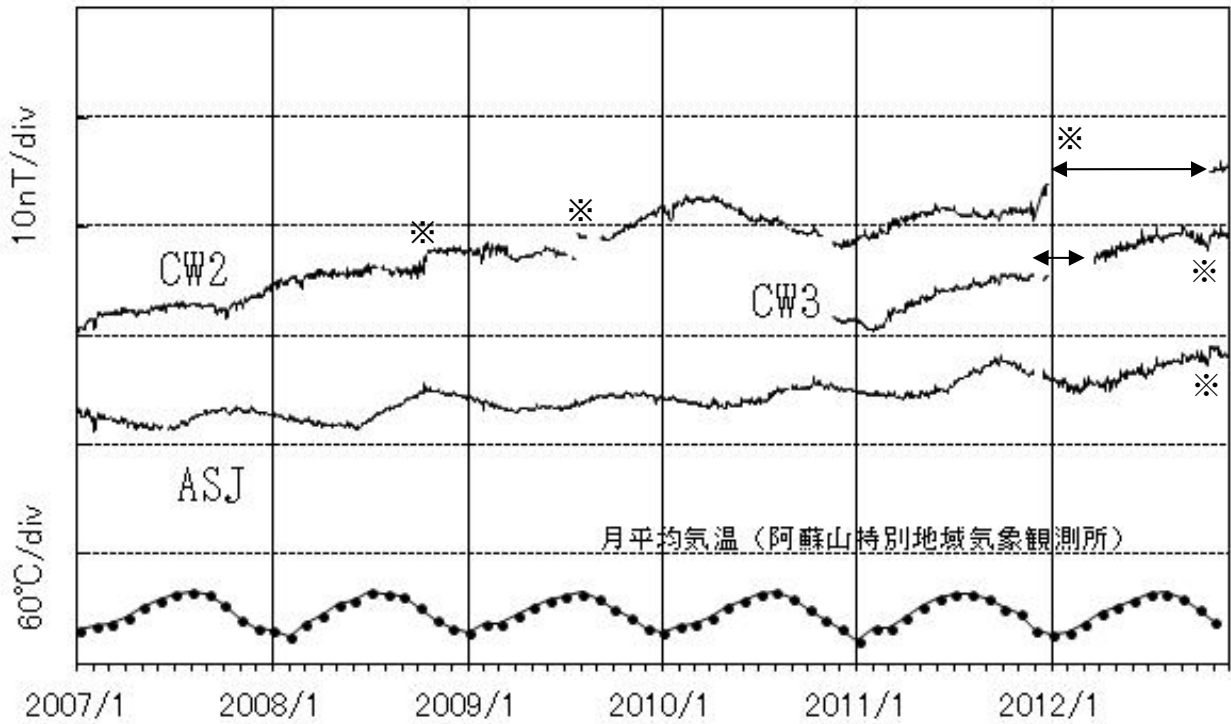


図10 阿蘇山 阿蘇山麓(AHK)を基準とした阿蘇中岳火口周辺の全磁力変化、及び阿蘇山特別地域気象観測所における月平均気温（2007年1月～2012年11月）

中岳第一火口の北西側火口縁にある観測点(CW2, CW3)では、2010年12月頃から全磁力が増加しており、火口地下の温度上昇を示唆している可能性があります。

nT（ナノテスラ）は磁場の強さを表す単位です。

※印の変化は火山活動に伴う変化ではないと考えられます。原因は不明ですが、検出器周辺の土砂の移動あるいは観測機器の変調による可能性があります。矢印は機器障害による欠測を示しています。

〔補足〕 火山体周辺の全磁力変化と火山体内部の温度変化

北側の観測点で 全磁力増加	[消磁]		火山体内部の 温度上昇 を示唆する変化
南側の観測点で 全磁力減少			
北側の観測点で 全磁力減少	[帯磁]		火山体内部の 温度低下 を示唆する変化
南側の観測点で 全磁力増加			

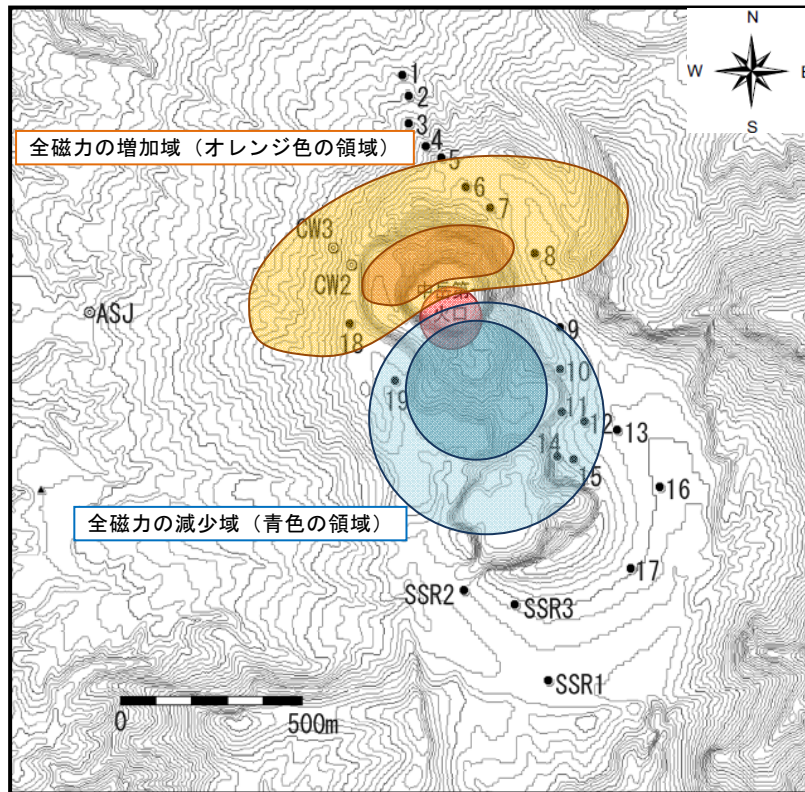


図 11 阿蘇山 【参考】中岳第一火口の熱消磁と全磁力変化パターン

中岳第一火口で熱消磁が発生した場合（火口直下の温度が上昇した場合）の全磁力変化のパターンを示しています。



図 12 阿蘇山 中岳第一火口南西側から撮影した第一火口内の状況

（左：11月9日撮影 右：10月19日撮影）

湯だまり量は10割（10月：10割）で特段の変化はありませんでした。

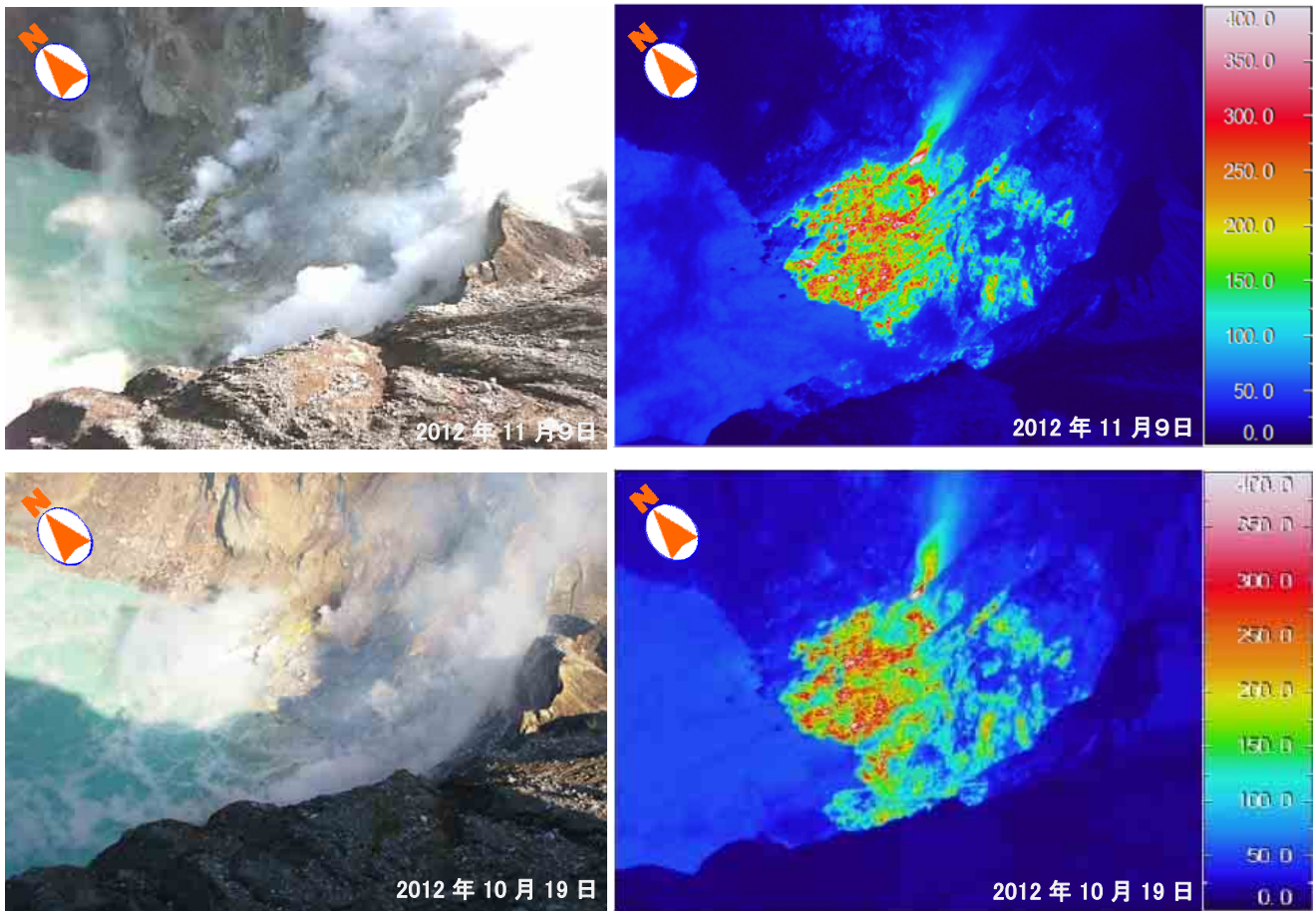


図 13 阿蘇山 赤外熱映像装置による中岳第一火口南側火口壁の地表面温度分布
（左：可視画像 右：赤外画像）
（上段：11月9日撮影 下段：10月19日撮影）
温度分布に、特段の変化はありませんでした。